

## 出版物紹介

井上順孝編著 『21世紀の宗教研究 脳科学・進化生物学と宗教学の接点』  
(平凡社、2014年8月)

### 内容紹介

2013年9月6日に國學院大學常磐松ホールで開催された公開学術講演会をもとに編集されたもの。講演会は日本宗教学会と國學院大學日本文化研究所の共催で行われたもので、テーマは「ネットワークする宗教研究」であった。講師は、ハーバード大学教授で比較神話学者のマイケル・ヴィツェル氏、総合研究大学院大学教授で生物学者の長谷川真理子氏、京都大学教授でキリスト教神学の研究者である芦名定道氏の3人である。それぞれの講演をもとにした論文に、講演会を企画し司会を務めた井上順孝が書き下ろしを加え、以下のような構成となった。

「宗教研究の新しいフォーメーション」(井上順孝)、「神話の「出アフリカ」—比較神話学が探る神話のはじまり—」(マイケル・ヴィツェル)、「進化生物学からみた宗教的概念の心的基盤」(長谷川真理子)、「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(芦名定道)。

以上のタイトルから分かるように、宗教研究の新しい分野の開拓を目指したものである。



井上順孝編集責任、李和珍訳 『신도사전 (초역)』  
(國學院大學、2015年2月)

### 内容紹介

國學院大學日本文化研究所編『神道事典(縮刷版)』(弘文堂、1999年)の第4章「神社」と第8章「流派・教団と人物」の韓国語訳である。研究員の李和珍が翻訳し、ソウルにある成均館大学の教員である林泰弘氏に校閲してもらったものである。韓国語に音訳しただけでは分かりづらい用語については日本語を付した。

なお、本書と同じ内容はオンラインでも利用できる。下記のサイトにアクセスし、検索または一覧から選択して、項目ごとの韓国語訳を見ることができる。

[http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do;jsessionid=7121D267FA234FAE0C71CCB22034C059?class\\_name=col\\_esk](http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do;jsessionid=7121D267FA234FAE0C71CCB22034C059?class_name=col_esk)



## 井上順孝発行、平藤喜久子編集担当『国際研究フォーラム報告書 2008～2013年度』

(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2015年2月)

### 内容紹介

日本文化研究所が毎年開催している国際研究フォーラムのうち、以下の回の内容・議論を記録した報告書。

- ・平成20(2008)年度「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」
- ・平成22(2010)年度「イスラームと向かい合う日本社会」
- ・平成23(2011)年度「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」
- ・平成24(2012)年度「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」
- ・平成25(2013)年度「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」

発題者や内容は多岐にわたるものではあるが、宗教文化教育の推進・デジタル情報技術の活用・さまざまな専門家との開かれたネットワーク構築といった問題意識については一貫していると言えよう。本研究事業・プロジェクトの近年の歩みを端的につかむことができる。



## 井上順孝編著『宗教文化教育の教材開発』

(2015年2月)

### 内容紹介

2011年度から2014年度までの4年間にわたって実施された科学研究費補助金・基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(代表者・國學院大學教授・井上順孝)による調査・研究の成果として刊行されたものである。オンライン(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/erc/index.html>)で作成したデータの概要紹介を中心としている。すなわち宗教文化教育の基本文献、宗教と深い関わりを持つ世界遺産のデータベース、宗教文化を学び実感する上で参考となる博物館のデータベース、そして宗教文化の理解のために参考になる映画のデータベースである。なお、データベースをすべて本書に収録すると頁数が増えるので、添付のDVDに、より詳細なデータベースの情報が記載されている。それぞれに適切な解説が付されており、中等教育、さらに高等教育における宗教文化教育を実践する教師・教員の役に立つことを目指すものである。



## 平藤喜久子『神社ってどんどころ？』

(ちくまプリマー新書、2015年2月)

### 内容紹介

高校生、大学生などの若者向けに、神社祭祀の歴史や神社建築、参拝の仕方や祭神のこと、といった基本的な知識や、神社をめぐる習俗、お祭り、神話について解説をした新書である。知っているようで知らないことや、外国人にどうやって伝えるか、といった点を考慮して執筆した。

目次は次の通り。「第1章 神社とは」「第2章 神さまのはなし」「第3章 神社のなかにはなにがある?」「第4章 日本人の生活と神社」「第5章 神社の祭り」「第6章 日本の神話」。主な神社についてまとめた地図や、参考文献も付した。とくに神社建築については、これまで調査などで撮影した写真を活用し、その特徴がよく理解できるよう工夫している。



## 櫻井義秀・平藤喜久子編著『よくわかる宗教学』

(ミネルヴァ書房、2015年3月)

### 内容紹介

宗教学の入門書として、さらに宗教文化士の試験にも対応するものとして編集した。宗教を学ぶ上で知っておくべき重要な概念、諸宗教の基礎知識を踏まえた上で、とくに現代社会との関わりから宗教について理解することができるような構成としている。「Ⅰ 理論」「Ⅱ 世界の諸宗教」「Ⅲ 宗教と現代」の三部構成になっている。主な目次は次の通り。

Ⅰ 理論：宗教文化とはなにか、宗教を学ぶとは—宗教文化士、宗教の定義 ほか

Ⅱ 世界の諸宗教：古代オリエント、ギリシア・ローマ、ゾロアスター教・マニ教、ユダヤ教、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教、神道 ほか

Ⅲ 宗教と現代：現代宗教への視座（宗教の世俗化とグローバル化、宗教市場と政教関係、宗教とソーシャル・キャピタル）、ファンダメンタリズムと宗教、震災と宗教、美術と宗教、映画と宗教、音楽と宗教 ほか

日本文化研究所からは、平藤喜久子のほか、井上順孝、加藤久子が執筆している。



## 塚田穂高『宗教と政治の転轍点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』

(花伝社、2015年3月)

### 内容紹介

「戦後日本社会において宗教運動がどのように、そしてなぜ政治に関わってきたのか」「自前の政治団体を設立しての選挙への候補擁立、既成政党・政治家の協同での支持、全くの不関与などのケースを分かつものは何なのか」といった問題について、文献資料の渉猟とフィールドワークに基づき、宗教社会学の立場から実証的に論じた一冊。戦後日本の宗教運動の政治活動の広がりや、ナショナリズムを共通軸として考えが近い諸団体が協同して既成の政党・政治家を支援する「保守合同—政治関与」（神社本庁＝神道政治連盟、日本会議等）と、自運動の独自の信念に立脚して自前の政治団体を結成し国政選挙等に自運動の成員を候補に擁立する「政教一致—政治進出」（創価学会＝公明党、幸福の科学＝幸福実現党等）という2つの軸を対照させることで体系的に描き出し、その規定要因としての運動の持つナショナリズムや世界観、ユートピア観の特性を分析的に探っている。2015年度日本宗教学会賞受賞作。



## 加藤久子『教皇ヨハネ・パウロ二世のことば—一九七九年、初めての祖国巡礼—』

(東洋書店、2014年12月)

### 内容紹介

1978年に選出された教皇ヨハネ・パウロ2世は、翌1979年、社会主義政権下にある祖国ポーランドを教皇として公式に訪問した。

本書では、訪問を阻止しようとする党・政府と、早期の訪問実現に向けて交渉を挑んだカトリック教会との間で繰り広げられたつばぜり合いの様子（第2章）、前例のない大型招聘事業の準備に奔走した、司教、司祭、一般の信徒らの現場での奮闘ぶり（第3章）など、訪問の舞台裏を史料から明らかにした。

また、訪問先各地での教皇の説教や挨拶の概要を歴史的な背景などとあわせて解説しているが（第4章）、特にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所跡地で行われたミサでの説教は全文を訳出し、音源から読み取れる信徒の反応なども紹介した（第1章）。



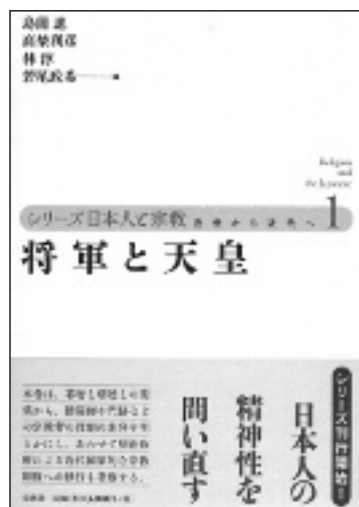
## 島蘭進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教1 将軍と天皇』

(春秋社、2014年9月)

### 内容紹介

日本人と宗教の関わりを探ることをテーマとして編まれたシリーズの第1巻。近年の研究成果を反映させること、また近世と近代の両方に目を配ることが企図されている。目次は以下の通りで、本研究所スタッフである星野靖二が第八章を執筆している。

序章 江戸幕府と朝廷（高埜利彦）、第一章 神仏習合と近世天皇の祭祀——神事・仏事・即位灌頂・大嘗祭（山口和夫）、第二章 伊勢神宮と東照宮（曾根原理）、第三章 江戸幕府と陰陽道・暦道（林淳）、第四章 近世社会における南都寺院と門跡——興福寺と奈良町をいとぐちに（水谷友紀）、第五章 明治維新と神祇官の「再興」（井上智勝）、第六章 明治維新と仏教（田中潤）、第七章 明治初期の国家神道——神社と制度史中心の歴史的叙述を見直す（島蘭進）、第八章 明治国家とキリスト教（星野靖二）



## 島蘭進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教3 生と死』

(春秋社、2015年1月)

### 内容紹介

近世・近代の日本宗教を多角的に検討するシリーズのうち、本巻は生と死を焦点とする。本研究所スタッフである遠藤潤が第五章を執筆している。朴澤直秀は、寺檀制度と葬祭について地域社会の実態に依拠して論じる。中嶋隆は、仮名草子、仏教説話、浮世草子、俳諧などを横断しつつ浮世の思想を解明する。谷口眞子は殉死・仇討ち・心中という具体的な行為から近世の死生観を考察する。岩田重則は、富士講や如来教などによる仏教の批判やとらえ直しを指摘するなどして、近世仏教墮落論を再検討する。遠藤は、平田篤胤の諸著作における幽冥思想を総合的に論じるとともに、神葬祭への展開も視野に収める。瀧澤利行は、中国から日本の近世・近代へという養生思想の展開を追う。今井昭彦は、近代の戦没者慰霊に対する薩摩藩の政策の影響を重視する。末木文美士は、近世・近代の移行期の来世論の展開に、合理化・世俗化とそれに逆行する流れの双方を見る。島蘭進の序論は、これら各論を包括する明解な見通しを与えている。

